

戦後70年を迎え、次世代への被爆体験の継承が課題となる中、3年がかりで体験を引き継ぎ、語り部となる広島市の「被爆体験伝承者」養成事業の1期生50人が巣立ち、本年度から活動を始めた。美作市在住の長尾春菜さん(27)は伝承者を志す2期生の一人。広島市との往復を続けながら被爆者の声に耳を傾け、来年4月のデビューを目指している。(大橋洋平) 1面関連

広島市「被爆体験伝承者」養成2期生

「他人の被爆体験を話す。伝承者を志望する一方でとても難しいけど、真摯に自分の言葉で語りたい」。長尾さんの不安は小さくなく、研修に参加。最終年度を迎え、現在は伝承者による「講話」の原稿作成に取り組んでいる。

大阪市出身。大学を卒業して関西の福祉施設に勤務していた11年末、伝承者事業の計画を知り「居ても立ってもいられなくなった」と言う。以前から平和、人権問題に関心があり、高校、大学時代は広島市を毎年のように訪ね、被爆者との交流会にも出席していた。



自ら修繕した空き家で畑を耕しながら暮らし、市の「地域おこし協力隊」の一員として廃校利活用事業に携わっている。広島との往復には車や新幹線を乗り継ぎ、計約4時間を要する。それでも「苦勞と思

来春デビュー目指す長尾さん(美作)

原爆の悲惨さ次世代へ

ったことはない。戦争の悲惨さを何も知らないままにいる怖さや焦りの方がずっと強かった」。

研修2年目に、10代で被爆した女性2人の体験を引き継ぐことを決めた。1人は爆心地近くで片目を失い、もう1人は生後間もない長男を原爆症で亡くした。

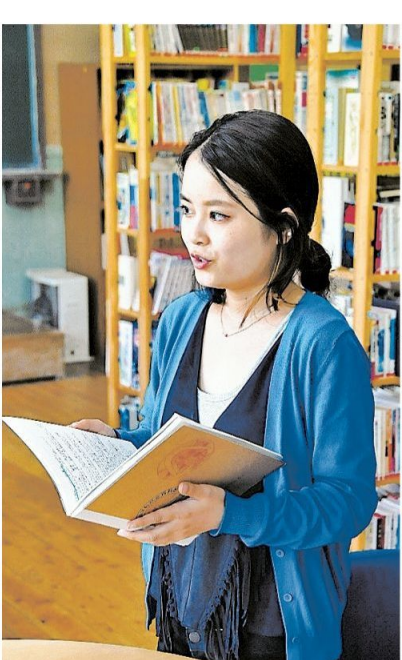
ほぼ1年間、毎月2人の元へ通い、少しずつ信頼関係を築いた。どこまで深く質問するべきか悩みながら他の伝承者候補生とともに体験を聞き取った。被爆直後に逃げた経路を一緒に歩いたり、時には互いに涙を流したこともあった。

「自分の言葉で語りたい」

「被爆体験伝承者」養成事業 被爆体験を継承し、原爆の悲惨さを訴え続けることを狙いに、ボランティアの非体験者らを3年計画で「伝承者」養成する広島市独自の取り組み。1年目は被爆者の講話や原爆被害に関する講義を受講、2年目は被爆者からの聞き取りや講話用原稿の作成、3年目は原稿の暗記、講話実習など。2012年度にスタートさせ受講者は本年度の4期生を含め16〜81歳の計210人。住居地は広島市を中心に北海道や関東、関西など広範にわたる。伝承者は広島平和記念資料館や各地の学校などで被爆体験の語り部活動を行う。

小さな文字が隙間なく連なるが、講話用の原稿は1万字以内に限定されている。「あふれる思いを詰め込むのが大変。美作での私自身の暮らしぶりも盛り込みたい」と苦笑する。

研修中、被爆者らが「嫌な予感がする」と口をそろえる場面があった。集団的自衛権の行使容認をめぐる議論など大きく変わろうとしている昨今の政治、社会情勢に話題が及んだ時だけでなく、生活拠点のある岡山、出身地の大阪でも末永く原爆の悲惨さを伝えていければ」と夢を描いている。



被爆者の言葉を書き留めたノートを手に、講話用原稿のイメージを膨らませる長尾さん

「過去の過ちを学ばない者は同じ過ちを繰り返す」